林 芙美子 短編集

北九州市立文学館文庫 ②

林 芙美子 短編集

北九州市立文学館文庫 ②

目次

蒼馬(あおうま)を見たり　抄　5
風琴(ふうきん)と魚の町　15
清貧の書　49
吹雪　91
河沙魚(かわはぜ)　115
晩菊(ばんぎく)　139
骨　167
水仙　193
下町(ダウン・タウン)　217
夜猿(やえん)　239
年譜　278

風琴（ふうきん）と魚の町

1　父は風琴を鳴らすことが上手であった。

音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車に揺られて退屈していた、母は、私がバナナを食(は)んでいる傍で経文を誦(ず)しながら、泪(なみだ)していた。「あなたに身を託したばかりに、私はこの様に苦労しなければならない」と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、時々尻で押しながら、粉ばかりになった刻み煙草を吸っていた。

私達は、この様な一家を挙げての遠い旅は一再ならずあった。

父は目蓋(まぶた)をとじて母へ何か優し気に語っていた。「今に見いよ」とでも云っているのであろう。

蜒々(えんえん)とした汀(なぎさ)を汽車は這(は)っている。動かない海と、屹立(きつりつ)した雲の景色は十四歳の私の眼に壁のように照り輝いて写った。その春の海を囲んで、たくさん、日の丸の旗をかかげた町があった。目蓋をとじていた父は、朱い日の丸の旗を見ると、せわしく立ちあがって汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も経文を合財袋(がっさいぶくろ)にしまいながら、立ちあがった。

「ほんとに、綺麗な町じゃ、まだ陽が高いけに、降りて弁当の代でも稼ぎまっせ」
で、私達三人は、おのおのの荷物を肩に背負って、日の丸の旗のヒラヒラした海辺の町へ降りた。
駅の前には、白く芽立った大きな柳の木があった。柳の木の向こうに、煤(すす)で汚れた旅館が二三軒並んでいた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かった。
浜通りを歩いていると、ある一軒の魚の看板の出た家から、ヒュッ、ヒュッ、と口笛が流れて来た。父はその口笛を聞くと、背負った風琴を思い出したのであろうか、風呂敷包みから風琴を出して肩にかけた。父の風琴は、おそろしく古風で、大きくて、肩に掛けられるべく、皮のベルトがついていた。
「まだ鳴らしなさるな」
母は、新しい町であったので、恥しかったのであろう、ちょっと父の腕をつかんだ。
口笛の流れて来る家の前まで来ると、鱗(うろこ)まびれになった若い男達が、ヒュッ、ヒュッ、と口笛に合せて魚の骨を叩いていた。
看板の魚は、青笹の葉を鰓(えら)にはさんだ鯛であった。私達は、しばらく、その男達が面白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。

「あにさん！　日の丸の旗が出ちょるが、何事ばしあるとな」
骨を叩く手を止めて、眼玉の赤い男がものうげに振り向いて口を開けた。
「市長さんが来たんじゃ」
「ホウ！　たまげたさわぎだな」
私達はまた歩調をあわせて歩きだした。
浜には小さい船着場がたくさんあった。河のようにぬめぬめした海の向うには、柔かい島があった。島の上には白い花を飛ばしたような木がたくさん見えた。その木の下を牛のようなものがのろのろ歩いていた。

2　ひどく爽やかな風景である。
私は、蓮根の穴の中に辛子をうんと詰めて揚げた天麩羅を一つ買った。そうして私は、母とその島を見ながら、一つの天麩羅を分けあって食べた。
「はようもどんなはいよ、売れな、売れんでもええとじゃけに……」
母は仄かな侘しさを感じたのか、私の手を強く握りながら私を引っぱって波止場の方へ歩いて行った。
肋骨のように、胸に黄色い筋のついた憲兵の服を着た父が、風琴を鳴らしながら「オ

イチニイ、オイチニイ」と坂になった町の方へ上って行った。母は父の鳴らす風琴の音を聞くとうつむいてシュンと鼻をかんだ。私は呆んやり油のついた掌を嘗めていた。

「どら、鼻をこっちい、やってみい」

母は衿にかけていた手拭を小指の先きに巻いて、私の鼻の穴につっこんだ。

「ほら、こぎゃん、黒うなっとるが」

母の、手拭を巻いた小指の先きが、椎茸のように黒くなった。

町の上には小学校があった。小麦臭い風が流れていた。

「こりゃ、まあ、景色のよかとこじゃ」

手拭でハタハタと髷の上の薄い埃を払いながら、眼を細めて、母は海を見た。

私は蓮根の天麩羅を食うてしまって、雁木の上の露店で、プチプチ章魚の足を揚げている、揚物屋の婆さんの手元を見ていた。

「いやしかのう、この子は……腹がばりさけても知らんぞ」

「章魚の足が食いたかなア」

「何云いなはると！　お父さんやおッ母さんが、こぎゃん貧乏しよるとが判らんとな！」

遠いところで、父の風琴が風に吹かれている。

「汽車へ乗ったら、またよかもの食わしてやるけに……」
「いんにゃ、章魚が食いたか！」
「さっち、そぎゃん、困らせよっとか？」
母は房のついた縞の財布を出して私の鼻の上で振ってみせた。
「ほら、これでも得心のいかぬか！」
薄い母の掌に、緑の粉を吹いた大きい弐銭銅貨が二三枚こぼれた。
「白か銭は無かろうが？　白かとがないと、章魚の足は買えんとぞ」
「あかか銭じゃ買えんとな？」
「この子は！　さっち、あげんこツウ、お父さんや、おッ母さんが食えんでも、めんめが腹ばい肥やしたかなア」
「食いたかもの、仕様がなかじゃなっか！」
母はピシッと私のビンタを打った。学校帰りの子供達が、渡し船を待っていた。私が殴られるのを見ると、子供達はドッと笑った。鼻血が咽へ流れて来た。私は青い海の照り返りを見ながら、塩っぱい涙を啜った。
「どこさか行ってしまいたい」
「どこさか行く云うても、お前がとのような意地っぱりは、人が相手にせんと……」

「相手にせんちゃよか！　遠いとこさ、一人で行ってしまいたか」
「お前は、めんめさえよければ、ええとじゃけに、バナナも食うつろが、蓮根も食いよって、富限者の子供でも、そげんな食わんぞな！」
「富限者の子供は、いつも甘美かもの食いよっとじゃもの、あぎゃん腐ったバナナば、恩にきせよる……」
「この子は、嫁様にもなる年頃で、食うこツばかり云いよる」
「ぴんたば殴るけん、ほら、鼻血が出つろうが……」
母は合財袋の中からセルロイドの櫛を出して、私の髪をなでつけた。私の房々した髪は櫛の歯があたるたびに、パラパラ音をたてて空へ舞い上った。
「わんわんして、火がつきゃ燃えつきそうな頭じゃ」
櫛の歯をハーモニカのように口にこすって、唾をつけると、母は私の額の上の捲毛をなでつけて云った。
「お父さんが商売があってみい、何でも買うてやるがの……」

3　私は背中の荷物を降ろしてもらった。
紫の風呂敷包みの中には、絵本や、水彩絵具や、運針縫いがはいっていた。

「風琴ばかり鳴らしよるが、商いがあったとじゃろか、行ってみい！」

私は桟橋を駆け上って、坂になった町の方へ行った。

町が狭隘いせいか、犬まで大きく見える。町の屋根の上には、天幕がゆれていて、桜の簪を差した娘達がゾロゾロ歩いていた。

「ええ――ご当地へ参りましたのは初めてでござりますが、当商会はビンツケをもって蟇の膏薬かなんぞのようなまやかしものはお売り致しませぬ。ええ――おそれおおくも、××宮様お買い上げの光栄を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、ここにもあると云う風なものとは違いまして……」

蟻のような人だかりの中に、父の声が非常に汗ばんで聞えた。

漁師の女が胎毒下しを買った。桜の簪を差した娘が貝殻へはいった目薬を買った。荷揚げの男が打ち身の膏薬を買った。ピカピカ手ずれのした黒い鞄の中から、まるで手品のように、色んな変った薬を出して、父は、輪をつくった群集の眼の前を近々と見せびらかして歩いた。

風琴は材木の上に転がっている。

子供達は、不思議な風琴の鍵をいじくっていた。ヴウ！　ヴウ！　この様に、時々風琴は、突拍子な音を立てて肩をゆする。すると、子供達は豆のように弾けて笑っ

た。私は占領された風琴の音を聞くと、たまらなくなって、群集の足をかきわけた。
「ええ――子宮、血の道には、このオイチニイの薬ほど効くものはござりませぬ」
私は材木の上に群れた子供達を押しのけると、風琴を引き寄せて肩に掛けた。
「何しよっと！　わしがとじゃけに……」
子供達は、断髪にしている私の男の子のような姿を見ると、
「散剪り、散剪り、男おなごやアい！」と囃したてた。
父は古ぼけた軍人帽子を、ちょいとなおして、振りかえって私を見た。
「邪魔しよっとじゃなか！　早よウおッ母さんのところへ、いんじょれ！」
父の眼が悲しげであった。
子供達は、また蠅のように風琴のそばに群れて白い鍵を押した。私は材木の上を縄渡りのようにタッタッと走ると、どこかの町で見た曲芸の娘のような手振りで腰を揉んだ。
「帯がとけとるどウ」
竹馬を肩にかついだ男の子が私を指差した。
「ほんま？」
私はほどけた帯を腹の上で結ぶと、裾を股にはさんで、キュッと後にまわして見せ

た。

男の子は笑っていた。

白壁の並んだ肥料倉庫の広場には針のように光った干魚が山のように盛り上げてあった。

その広場を囲んで、露店のうどん屋が鳥のように並んで、仲士達が立ったまま、つるつるうどんを啜っていた。

露店の硝子箱には、煎餅や、天麩羅がうまそうであった。私は硝子箱に凭れて、煎餅と天麩羅をじっと覗いた。硝子箱の肌には霧がかかっていた。

「どこの子なア、そこへ凭れちゃいけんがのう！」

乳房を出した女が赤ん坊の鼻汁を啜りながら私を叱った。

4　山の朱い寺の塔に灯がとぼった。島の背中から鰯雲が湧いて、私は唄をうたいながら、波止場の方へ歩いた。

桟橋には灯がついたのか、長い竿の先きに籠をつけた物売りが、白い汽船の船腹をかこんで声高く叫んでいた。

母は待合所の方を見上げながら、桟橋の荷物の上に凭れていた。

「何ばしよったと、お父さん見て来たとか？」
「うん、見て来た！　山のごツ売れよった」
「ほんまな？」
「ほんま！」
私の腰に、また紫の包みをくくりつけてくれながら、母の眼は嬉し気であった。
「ぬくうなった、風がぬるぬるしよる」
「小便がしたか」
「かまうこたなか、そこへせいよ」
桟橋の下にはたくさん藻や塵芥が浮いていた。その藻や塵芥の下を潜って影のような魚がヒラヒラ動いている。帰って来た船が鳩のように胸をふくらませた。その船の吃水線に潮が盛り上ると、空には薄い月が出た。
「馬の小便のごつある」
「ほんでも、長いこと、きばっとったとじゃもの」
私は、あんまり長い小便にあいそをつかしながら、うんと力んで自分の股間を覗いてみた。白いプクプクした小山の向うに、空と船が逆さに写っていた。私は首筋が痛くなるほど身を曲めた。白い小山の向うから霧を散らした尿が、キラキラ光って桟橋

をぬらしている。
「何しよるとじゃろ、墜ちたら知らんぞ、ほら、お父さんが戻って来よるが」
「ほんまか？」
「ほんまよ」
股間を心地よく海風が吹いた。
「くたびれなはったろう？」
母がこう叫ぶと、父は手拭で頭をふきながら、雁木の上の方から、私達を呼んだ。
「うどんでも食わんか？」
私は母の両手を握って振った。
「嬉しか！　お父さん、山のごつ売ったとじゃろなア……」
私達三人は、露店のバンコに腰をかけて、うどんを食べた。私の丼の中には三角の油揚が這入っていた。
「どうしてお父さんのも、おッ母さんのも、狐がはいっとらんと？」
「やかましいか！　子供は黙って食うがまし……」
私は一片の油揚を父の丼の中へ投げ入れてニヤッと笑った。父は甘美そうにそれを食った。

「珍しかとじゃろな、二三日泊ってみたらどうかな」
「初め、癈兵じゃろう云いよったが、風琴を鳴らして、ハイカラじゃ云う者もあった」
「ほうな、勇ましか曲をひとつふたつ、聴かしてやるとよかったに……」
私は、残ったうどんの汁に、湯をゆらゆらついで長いこと乳のように吸った。
町には輪のように灯がついた。市場が近いのか、頭の上に平たい桶を乗せた魚売りの女達が、「ばんより！　ばんよりはいりゃんせんか」と呼び売りしながら通って行く。
「こりゃ、まあ、面白かところじゃ、汽車で見たりゃ、寺がおそろしく多かったが、漁師も多かもん、薬も売れようたい」
「ほんに、おかしか」
父は、白い銭をたくさん数えて母に渡した。
「のう……章魚の足が食いたかア」
「また、あげんこツ！　お父さんな、怒んなさって、風琴ば海さ捨てる云いなはるばい」
「また、何、ぐずっちょるとか！」
父は、豆手帳の背中から鉛筆を抜いて、薬箱の中と照し合せていた。

5　夜になると、夜桜を見る人で山の上は群った蛾のように賑わった。私達は、駅に近い線路ぎわのはたごに落ちついて、汗ばんだまま腹這っていた。

「こりゃもう、働きどうの多い町らしいぞ、桜を見ようとてお前、どこの町であぎゃん賑おうとったか？」

「狂人どうが、何が桜かの、たまげたものじゃ」

別に気も浮かぬと云った風に、風呂敷包みをときながら、母はフンと鼻で笑った。

「ほう、お前も立って、ここへ来てみいや、綺麗かぞ」

煤けた低い障子を開けて、父は汚れたメリヤスのパッチをぬぎながら、私を呼んだ。

「寿司ば食いとうなるけに、見とうはなか……」

私は立とうともしなかった。母はクックッと笑っていた。腫物のようにぶわぶわした畳の上に腹這って、母から読本を出してもらうと、私は大きい声を張りあげて、「ほごしょく」の一部を朗読し始めた。母は、私が大きい声で、すらすらと本を読む事が、自慢ででもあるのであろう。「ふん、そうかや」と、度々優しく返事をした。

「百姓は馬鹿だな、尺取虫に土瓶を引っかけるてかい？」

「尺取虫が木の枝のごつあるからじゃろ」

「どぎゃん虫かなア」

「田舎へ行くとよくある虫じゃ」
「ふん、長いとじゃろ？」
「蚕のごつある」
「お父さん、ほんまに見たとか？」
「ほんまよ」
汚点だらけな壁に童子のような私の影が黒く写った。風が吹き込むたび、洋燈のホヤの先きが燃え上がって、誰か「雨が近い」と云いながら町を通っている。
「まあ、こんな臭か部屋、なんぼうにきめなはった？」
「泊るだけでよかもの、六拾銭たい」
「たまげたなア、旅はむごいものじゃ」
あんまり静かなので、波の音が腹に這入って来るようだ。蒲団は一組で三枚、私はいつものように、読本を持ったまま、沈黙って裾へはいって横になった。
「おッ母さん！　もう晩な、何も食わんとかい？」
「もう、何ちゃいらんとッ、蒲団にはいったら、寝ないかんとッ」
「うどんば、食べたじゃろが？　白か銭ばたくさん持っちょって、何も買うてやらんげに思うちょるが、宿屋も払うし、薬の問屋へも払うてしまえば、あの白か銭は、の

うなってしまうがの、早よ寝て、早よ起きい、朝いなったら、白かまんまいっぱい食べさすッでなア」

座蒲団を二つに折って私の裾にさしあってはいると、父はこう云った。私は、白かまんまと云う言葉を聞くと、ポロポロと涙があふれた。

「背丈が伸びる頃ちうて、あぎゃん食いたかものじゃろうかなア」

父も母も、裾に寝ている私が、泪を流していると云う事は知らぬ気であった。

「あれも、本ばよう読みよるで、どこかきまったりゃ、学校さあげてやりたか」

「明日、もう一日売れたりゃ、ここへ坐ってもええが……」

「ここはええところじゃ、駅へ降りた時から、気持ちが、ほんまによかった。ここは何ちうてな?」

「尾の道よ、云うてみい」

「おのみち、か?」

「海も山も近い、ええところじゃ」

母は立って洋燈を消した。

6　この家の庭には、石榴の木が四五本あった。その石榴の木の下に、大きい囲いの浅い井戸があった。二階の縁の障子をあけると、その石榴の木と井戸が真下に見えた。井戸水は塩分を多分に含んで、顔を洗うと、ちょっと舌が塩っぱかった。水は二階のはんど甕の中へ、二日分位汲み入れた。縁側には、七輪や、馬穴や、ゆきひらや、鮑の植木鉢や、座敷は六畳で、押入れもなければ床の間もない。これが私達三人の落ちついた二階借りの部屋の風景である。

朝になると、借りた蒲団の上に白い風呂敷を掛けた。

階下は、五十位の夫婦者で、古ぼけた俥をいつも二台ほど土間に置いていた。おじさんが、俥をひっぱった姿は見た事はないが、誰かに貸すのでもあろう、時々、一台の俥が消える時がある。おばさんは毎日、石榴の木の見える縁側で、白い昆布に辻占を巻いて、帯を結ぶ内職をしていた。

ここの台所は、いつも落莫として食物らしい匂いをかいだ事がない。井戸は、囲いが浅いので、よく猫や犬が墜ちた。そのたび、おばさんは、禿の多い鏡を上から照らして、深い井戸の中を覗いた。

「尾の道の町に、何か力があっとじゃろ、大阪までも行かいでよかった」

「大阪まで行っとれば、ほんのこて今頃は苦労しよっとじゃろ」

この頃、父も母も、少し肥えたかのように、私の眼にうつった。
私は毎日いっぱい飯を食った。嬉しい日が続いた。
「腹が固うなるほど、食うちょれ、まんまさえ食うちょりゃ、心配なか」
「のう――おッ母さん！　階下のおばさんたち、飯食うちょるじゃろか？」
「どうして？　食うちょらな動けんがの」
「ほんでも、昨夜な、便所へはいっちょったら、おじさんが、おばさんに、俥も持って行かせ、俺はこのまま死んだ方がまし、云うてな、泣きよんなはった」
「ほうかや！　あの俥も金貸しにばし、取られなはったとじゃろ」
「親類は、あっとじゃろか、飯食いなはるとこ、見たことなか」
「そぎゃんこツ云うもんじゃなかッ、階下のおじさんな、若い時船へ乗りよんなはって、機械で足ば折んなはったとオ、誰っちゃ見てくれんけん、おばさんが昆布巻きするきりで、食うて行きなはるとだい、可哀そうだろうがや」
「警察へ行っても駄目かや？」
「誰もそんな事知らんと云うて、皆、笑いまくるぞ」
「そんでも、悪るいこつすれば怒るだろう？」
「誰がや？」

「人の足折って、知らん顔しちょるもんがよオ」
「金を持っちょるけに、かなわんたい」
「階下のおじさんな、馬鹿たれか？」
「何ば云よっとか！」

父は風琴と弁当を持って、一日中、「オイチニイ　オイチニイ」と、町を流して薬を売って歩いた。
「漁師町に行ってみい、オイチニイの薬が来たいうて、皆出て来るけに」
「風体が珍しかけにな」

長いこと晴れた日が続いた。
山では桜の花が散って、いっせいに四囲が青ばんで来た。
遠くで初蛙も啼いた。白い除虫菊の花も咲いた。

7

「学校へ行かんか？」
ある日、山の茶園で、薔薇の花を折って来て石榴の根元に植えていたら、商売から

帰った父が、井戸端で顔を洗いながら、私にこう云った。
「学校か？　十三にもなって、五年生にはいるものはなかもの、行かぬ」
「学校へ行っとりゃ、ええことがあるに」
「六年生に入れてくれるかな？」
「沈黙っとりゃ、六年生でも入れようたい、よう読めるとじゃもの……」
「そんでも、算術はむずかしかろな？」
「ま、勉強せい、明日は連れて行ってやる」
学校に行けることは、不安なようで嬉しい事であった。その晩、胸がドキドキして、私は子供らしく、いつまでも瞼の裏に浮んで来る白い数字を数えていた。
十二時頃ででもあったであろうか、ウトウトしかけていると、裏の井戸で、重石か何か墜ちたように凄まじい水音がした。犬も猫も、井戸が深いので今までは墜ちこんでも嘗めるような水音しかしないのに、それは、聞き馴れない大きい水音であった。
「おッ母さん！　何じゃろか？」
「起きとったとか、何じゃろかのう……」
そう話しあっている時、また水をはねて、何か悲しげな叫び声があがった。階下のおじさんが、わめきながら座敷を這っている。

「あんた！　起きまっせ！　井戸ん中へ誰か墜ちたらしかッ」
「誰が？」
「起きて、早よう行ってくれまっせ、おばさんかも判らんけに……」
私は体がガタガタ震えて、もう、ものが云えなかった。
「どぎゃんしたとじゃろか？」
「お前も一緒に来いや、こまい者は寝とらんかッ！」
父は呶鳴りながら梯子段を破るようにドンドン降りて行った。
私一人になると、周囲から空気が圧して来た。私はたまらなくなって、雨戸を開き、障子を開けた。
石榴の葉が、ツンツン豆の葉のように光って、山の上に盆のような朱い月が出ている。肌の上を何かついと走った。
「どぎゃん、したかアい！」
思わず私は声をあげて下へ叫んでみた。
母が、鏡と洋灯を持っているのが見えた。
「ハイ！　この縄を一生懸命握っとんなはい」
父はこうわめきながら、縄の先を、真中の石榴の幹へ結んでいた。

「いま、うちで、はいりますにな、辛抱して、縄へさばっといて下さいや」
おろおろした母の声も聞えた。
「まさこ！　降りてこいよッ」
父は覗いている私を見上げて呶鳴った。私は寒いので、父の、黄色い筋のはいった服を背中にひっかけると、転げるように井戸端へ降りて行った。縁側ではおじさんが、「うはははははうはははははは」と、泡を食ったような声で呶鳴っていた。
「ええ子じゃけに、医者へ走って行け、おとなしう云うて来るんぞ」
石畳の上は、淡い燈のあかりでぬるぬる光っていた。温い夜風が、皆の裾を吹いて行く。井戸の中には、幾本も縄がさがって「ううん、ううん」唸り声が湧いていた。
「早よう行って来ぬか！　何しよっとか？」
私は、見当もつかない夜更けの町へ出た。波と風の音がして、町中、腥い臭いが流れていた。小満の季節らしく、三味線の音のようなものが遠くから聞えて来る。
いつから、手を通していたのであろうか、首のところで、釦をとめて、私は父の道化た憲兵の服を着ていた。そのためだろうか、街角の医者の家を叩くと、俥夫は寝呆けて私がいまだかつて、聞いた事がないほどな丁寧な物云いで、いんぎんに小腰を曲めた。

「よろしうございますとも、一時でありましょうとも、二時でありましょうとも、医者の役目でございます故、私さえ走るならば、先生も起きましょうし、じき、上りまするでございます」

8　井戸へ墜ちたおばさんは、片手にびしょびしょの風呂敷包みを抱いて上って来た。その黒い風呂敷包みの中には**繻子の鯨帯**と、おじさんが船乗り時代に買ったという、ラッコの毛皮の帽子がはいっていた。おばさんは、夜更けを待って、裏口から質屋へ行く途中ででもあったのであろう。おばさんの帯の間から質屋の通いがおちた。母は「このひとも苦労しなはる」と、思ったのか、その通いを、医者の見ぬように隠した。

「あぶないところであった」

「よかりましょうか？」

「打身をしとらぬから、血の道さえおこらねば、このままでよろしかろ」

一度は食べてみたいと思ったおばさんの、内職の昆布が、部屋の隅に散乱していた。五ツ六ツ私は口に入れた。山椒がヒリッと舌をさした。

「生きてあがったとじゃから、井戸浚えもせんでよかろ」

朝、その水で私達は口をガラガラ嗽いだ。井戸の中には、おばさんの下駄が浮いていた。私は禿げた鏡を借りて来て、井戸の中を照らしながら、下駄を笊で引きあげた。母は、石囲いの四ツ角に、小さい盛塩をして「オンバラジャア、ユウセイソワカ」と掌を合しておがんだ。

曇り日で、雨らしい風が吹いている。

父は、着物の上から、下のおじさんの汚れた小倉の袴をはいて、私を連れて、山の小学校へ行った。

小学校へ行く途中、神武天皇を祭った神社があった。その神社の裏に陸橋があって、下を汽車が走っていた。

「これへ乗って行きゃア、東京まで、沈黙っちょっても行けるんぞ」

「東京から、先の方は行けんか？」

「夷の住んどるけに、女子供は行けぬ」

「東京から先は海か？」

「ハテ、お父さんも行ったこたなかよ」

随分、石段の多い学校であった。父は石段の途中で何度も休んだ。学校の庭は沙漠

のように広かった。四隅に花壇があって、ゆすらうめ、鉄線蓮、おんじ、薊、ルピナス、躑躅、いちはつ、などのようなものが植えてあった。

校舎の上には、山の背が見えた。振り返ると、海が霞んで、近くに鳥がいくつも見えた。

「待っとれや」

父は、袴の結び紐の上に手を組んで、教員室の白い門の中へはいって行った。――よっぽど柳には性のあった土地と見えて、この庭の真中にも、柔かい芽を出した大きい、柳の木が一本、羊のようにフラフラ背を揺っていた。

廻旋木にさわってみたり、遊動円木に乗ってみたり、私は新しい学校の匂いをかいだ。だが、なぜか、うっとうしい気持ちがしていた。このまま走って、石段を駈け降りようかと、学校の門の外へ出たが、父が、「ヨオイ！」と私を呼んだので、私は水から上がった鳥のように身震いして教員室の門をくぐった。

教員室には、二列になって、カナリヤの巣のような小さい本箱が並んでいた。真中に火鉢があった。そこに、父と校長が並んでいた。父は、私の顔を見ると、いんぎんにおじぎをした。だから、私も、おじぎをしなければならないのだろうと、丁寧に最敬礼をした。校長は満足気であった。

「教室へ連れて行きましょう」

「ほんなら、私はこれで失礼いたします。何ともハヤ、よろしくお願い申し上げます」

父が門から去ると私は悲しくなった。校長は背の高い人であった。私はどこかの学校で覚えた、「七尺下がって師の影を踏まず」と、云う言葉を思い出したので、遠くの方から、校長の後へついて行った。

「道草食わずと、早よウ歩かんか！」

校長は振り返って私を叱った。窓の外のポンプ井戸の水溜りで、何かカロカロ……鳴いていた。

雨戸のような歪(ゆが)んだ扉を開けると、ワアンと子供達の息が私にかかった。（女子六年　イ組）と、黒板の上に札が下がっていた。私は五年を半分飛ばして六年にあがる事が出来た。ちょっと不安であった。

9　長い間雨が続いた。

私はだんだん学校へ行く事が厭(いや)になった。学校に馴れると、子供達は、寄ってたかって私の事を「オイチニイの新馬鹿大将の娘じゃ」と、云った。

私はチャップリンの新馬鹿大将と、父の姿とは、似つかないものだと思っていた。

それ故、私は、いつか、父にその話をしようと思ったが、父は長い雨で腐り切っていた。

黄色い粟飯が続いた。私は飯を食べるごとに、**厩を聯想**しなければならなかった。私は学校では、弁当を食べなかった。弁当の時間は唱歌室にはいってオルガンを鳴らした。私は、父の風琴の譜で、オルガンを上手に弾いた。

私は、言葉が乱暴なので、よく先生に叱られた。先生は、三十を過ぎた太った女のひとであった。いつも前髪の大きい庇から、雑巾のような毛束を覗かしていた。

「東京語をつかわねばなりませんよ」

それで、みんな、「うちはね」と云う美しい言葉を使い出した。

私は、それを時々失念して、「わしはね」と、云っては皆に嘲笑された。学校へ行くと、見た事もない美しい花と、石版絵がたくさん見られて楽しみであったが、大勢の子供達は、いつまでたっても、私に対して、「新馬鹿大将」を止めなかった。

「もう学校さ行きとうはなか？」

「小学校だきゃ出とらんな、おッ母さんば見てみい、本も読めんけん、いつもかつも、眠っとろうがや」

「ほんでも、うるそうして……」

「何がうるさかと？」
「云わん！」
「云わんか？」
「云いとうはなか！」
刀で剪りたくなるほど、雨が毎日毎日続いた。階下のおばさんは、毎日昆布の中に辻占と山椒を入れて帯を結んでいた。もう、黄いろいご飯も途絶え勝ちになった。母は、階下のおばさんに荷札に針金を通す仕事を探してもらった。父と母と競争すると母の方が針金を通すのは上手であった。
私は学校へ行くふりをして学校の裏の山へ行った。ネルの着物を通して山肌がくんくん匂っている。雨が降って来ると、風呂敷で頭をおおうて、松の幹に凭れて遊んだ。
天気のいい日であった。山へ登って、萩の株の蔭へ寝ころんでいたら、体操の先生のように髪を長くした男が、お梅さんと云う米屋の娘と遊んでいた。恥ずかしい事だと思ったのか私は山を降りた。真珠色に光った海の色が、チカチカ眼をさした。
父と母が、「大阪の方へ行ってみるか」と云う風な事をよく話しだした。私は、大阪の方へ行きたくないと思った。いつの間にか、父の憲兵服も無くなっていた。だから風琴がなくなった時の事を考えると、私は胸に塩が埋ったようで悲しかった。

「俥でも引っぱってみるか？」
父が、腐り切ってこう云った。その頃、私は好きな男の子があったので、なんぼうにもそれは恥ずかしい事であった。その好きな男の子は、魚屋のせがれであった。いつか、その魚屋の前を通っていたら、知りもしないのに、その子は私に呼びかけた。
「魚が、こぎゃん、えっと、えっと、釣れたんどう、一尾やろうか、何がええんな」
「ちぬご」
「ちぬごか、あぎゃんもんがええんか」
家の中は誰もいなかった。男の子は鼻水をずるずる啜りながら、ちぬごを新聞で包んでくれた。ちぬごは、まだぴちぴちして鱗が銀色に光っていた。
「何枚着とるんな」
「着物か？」
「うん」
「ぬくいけん何枚も着とらん」
「どら、衿を数えてみてやろ」
男の子は、腥い手で私の衿を数えた。数え終ると、皮剥ぎと云う魚を指差して、
「これも、えっとやろか」と云った。

「魚、わしゃ、何でも好きじゃんで」
「魚屋はええど、魚ばア食える」
男の子は、いつか、自分の家の船で釣りに連れて行ってやると云った。私は胸に血がこみあげて来るように息苦しさを感じた。
学校へ翌(あく)る日行ってみたら、その子は五年生の組長であった。

10　誰の紹介であったか、父は、どれでも一瓶拾銭の化粧水を仕入れて来た。青い瓶もあった。紅い瓶も、黄いろい瓶も、みな美しい姿をしていた。模様には、ライラックの花がついて、きつく握ると、瓶の底から、うどん粉のような雲があがった。
「まあ、美しか！」
「拾銭じゃ云うたら、娘達や買いたかろ」
「わしでも買いたか」
「生意気なこと云いよる」
父はこの化粧水を売るについて、この様な唄をどこからか習って来た。
一瓶つければ桜色
二瓶つければ雪の肌

諸君！　買いたまえ
買わなきゃ炭団となるばかし。

父は、この節に合せて、風琴を鳴らす事に、五日もかかってしまった。

「早よう売らな腐る云いよった」

「そぎゃん、ひどかもん売ってもよかろか？」

「ハテ、良かろか、悪かろか、食えんもな、仕様がなかじゃなッか」

尾の道の町はずれに吉和と云う村があった。帆布工場もあって、女工や、漁師の女達がたくさんいた。父はよくそこへ出掛けて行った。

私は、こういうハイカラな商売は好きだと思った。私は、赤い瓶を一ツ盗んで、はんど甕の横に隠しておいた。

「時勢が進むと、安うて、ハイカラなものが出来るもんかなア」

町中「一瓶つければ桜色」の唄が流行った。化粧水は、持って出るたび、よく売れて行った。

その頃、籠の中へ、牛肉を入れて売って歩く婆さんが来た。もうけがあるのであろう、母は気前よく、よくそれを買った。蒟蒻を入れると、血のような色になって、「犬

の肉ででもあっとじゃろ」と、三人とも安いのでよく、その赤い肉を食った。
「やっぱし、犬の肉でやんすで」
階下のおばさんは、買った肉を犬にくれたら、やっぱし食わなかったと、それが犬の肉である事を保証した。
雨がカラリと霽(は)れた日が来た。ある日、山の学校から帰って来ると、母が、息を詰めて泣いていた。
「どぎゃん、したと?」
「お父さんが、のう……警察い行きなはった」
私は、この時の悲しみを、一生忘れないだろう。通草(あけび)のように瞼が重くなった。
「おッ母さんな、警察い、ちょっと行って来ッで、ええ子して待っとれ」
「わしも行く。――わしも云うたい、お父さん帰るごと」
「子供が行ったっちゃ、おごらるるばかり、待っとれ!」
「うんにゃ! うんにゃ! 一人じゃ淋(さび)しか!」
「ビンタばやろかいッ!」
母が出て行った後、私は、オイオイ泣いた。階下のおばさんが、這い上って来て、一緒に傍に横になってくれても、私は声をあげて泣いた。

「お父さんが云わしたばい、あア、おばっさん！　戦争の時、缶詰に石ぶち込んで、成金さなったものもあるとじゃもの、俺がとは砂粒よか、こまかいことじゃ云うて……」

「泣きなはんな、お父さんは、ちっとも悪うはなかりゃん、あれは製造する者が悪いんじゃけのう」

「どぎゃんしても俺や泣く！　飯ば食えんじゃなっか！」

私は、夕方町の中の警察へ走って行った。

唐草模様のついた鉄の扉に凭れて、父と母が出て来るのを待った。「オンバラジャア、ユウセイソワカ」私は、鉄の棒を握って、何となく空に祈った。

淋しくなった。

裏側の水上署でカラカラ鈴の鳴る音が聞える。

私は裏側へ廻って、水色のペンキ塗りの歪んだ窓へよじ登って下を覗いてみた。

電気が煌々とついていた。部屋の隅に母が鼠よりも小さく私の眼に写った。父が、その母の前で、巡査にぴしぴしビンタを殴られていた。

「さあ、唄うてみんか！」

父は、奇妙な声で、風琴を鳴らしながら、

「二瓶つければ雪の肌」と、唄をうたった。
「もっと大きい声で唄わんかッ！」
「ハッハッ……うどん粉つけて、雪の肌いなりゃア、安かものじゃ」
悲しさがこみあげて来た。父は闇雲に、巡査に、ビンタをぶたれていた。
「馬鹿たれ！　馬鹿たれ！」
私は猿のように声をあげると、海岸の方へ走って行った。
「まさこヨイ！」と呼ぶ、母の声を聞いたが、私の耳底には、いつまでも何か遠く、歯車のようなものがギリギリ鳴っていた。

（改造　昭和六年四月）

晩菊（ばんぎく）

夕方、五時頃うかがいますと云う電話であったので、きんは、一年ぶりにねえ、まア、そんなものですかと云った心持ちで、電話を離れて時計を見ると、まだ五時には二時間ばかり間がある。まずその間に、何よりも風呂へ行っておかなければならないと、女中に早目な、夕食の用意をさせておいて、きんは急いで風呂へ行った。別れたあの時よりも若やいでいなければならない。けっして自分の老いを感じさせては敗北だと、きんはゆっくりと湯にはいり、帰って来るなり、冷蔵庫の氷を出して、こまかくくだいたのを、二重になったガーゼに包んで、鏡の前で十分ばかりもまんべんなく氷で顔をマッサージした。皮膚の感覚がなくなるほど、顔が赧くしびれて来た。五十六歳と云う女の年齢が胸の中で牙をむいているけれども、きんは女の年なんか、長年の修業でどうにでもごまかしてみせると云ったきびしさで、取っておきのハクライのクリームで冷たい顔を拭いた。鏡の中には死人のように蒼ずんだ女の老けた顔が大きく眼をみはっている。化粧の途中でふっと自分の顔に厭気がさして来たが、昔はエハガキにもなったあでやかな美しい自分の姿が瞼に浮かび、きんは膝をまくって、太股の肌をみつめた。むっくりと昔のように盛りあがった肥りかたではなく、細い静脈の毛管が浮き立っている。只、そう痩せてもいないと云うことが心やすめにはなる。ぴっちりと太股が合っている。風呂では、きんは、きまって、きちんと坐った太股の窪

みへ湯をそそぎこんでみるのであった。湯は、太股の溝へじっと溜っている。ほっとしたやすらぎがきんの老いを慰めてくれた。まだ、男は出来る。それだけが人生の力頼みのような気がした。きんは、股を開いて、そっと、内股の肌を人ごとのようになでてみる。すべすべとして油になじんだ鹿皮のような柔らかさがある。西鶴の「諸国を見しるは伊勢物語」のなかに、伊勢の見物のなかに、三味を弾くおすぎ、たま、と云う二人の美しい女がいて、三味を弾き鳴らす前に、真紅の網を張りめぐらせて、その網の目から二人の女の貌をねらっては銭を投げる遊びがあったと云うのを、きんは思い出して、紅の網を張ったと云う、その錦絵のような美しさが、いまの自分にはもう遠い過去の事になり果てたような気がしてならなかった。若い頃は骨身に沁みて金慾に目が暮れていたものだけれども、年を取るにつれて、しかも、ひどい戦争の波をくぐり抜けてみると、きんは、男のない生活は空虚で頼りない気がしてならない。年齢によって、自分の美しさも少しずつは変化して来ていたし、その年々で自分の美しさの風格が違って来ていた。きんは年を取るにしたがって派手なものを身につける愚はしなかった。五十を過ぎた分別のある女が、薄い胸に首飾りをしてみたり、湯もじにでもいいような赤い格子縞のスカートをはいて、白サティンの大だぶだぶのブラウスを着て、つば広の帽子で額の皺を隠すような妙な小細工はきんはきらいだった。そ

れかと云って、着物の襟裏から紅色をのぞかせるような女郎のようないやらしい好みもきらいであった。

きんは、洋服は此時代になるまで一度も着た事はない。すっきりとした真白い縮緬の襟に、藍大島の絣の袷、帯は薄いクリーム色の白筋博多。水色の帯揚げは絶対に胸元にみせない事。たっぷりとした胸のふくらみをつくり、腰は細く、地腹は伊達巻で締めるだけ締めて、お尻にはうっすりと真綿をしのばせた腰蒲団をあてて西洋の女の粋な着つけを自分で考え出していた。髪の毛は、昔から茶色だったので、色の白い顔には、その髪の毛が五十を過ぎた女の髪とも思われなかった。大柄なので、裾みじかに着物を着るせいか、裾もとがきりっとして、さっぱりしていた。男に逢う前は、かならずこうした玄人っぽい地味なつくりかたをして、鏡の前で、冷酒を五勺ほどきゅうとあおる。そのあとは歯みがきで歯を磨き、酒臭い息を殺しておく事もぬかりはない。ほんの少量の酒は、どんな化粧品をつかったよりもきんの肉体には効果があった。薄っすりと酔いが発しると、眼もとが紅く染まり、大きい眼がうるんで来る。蒼っぽい化粧をして、リスリンでといたクリームでおさえた顔の艶が、息を吹きかえしたようにさえざえして来る。紅だけは上等のダークを濃く塗っておく。紅いものと云えば唇だけである。きんは、爪を染めると云う事も生涯した事がない。老年になってから

の手はなおさら、そうした化粧はものほしげで貧弱でおかしいのである。乳液でまんべんなく手の甲を叩いておくだけで、爪は癇性なほど短く剪って羅紗の裂で磨いて置く。長襦袢の袖口にかいま見える色彩は、すべて淡い色あいを好み、水色と桃色のぼかしたたづななぞを身につけていた。香水は甘ったるい匂いを、肩とぽってりした二の腕にこすりつけておく。耳朶なぞへは間違ってもつけるような事はしないのである。きんは女である事を忘れたくないのだ。世間の老婆の薄汚なさになるのならば死んだ方がましなのである。――人の身にあるまじきまでたわわなる、薔薇と思えどわが心地する。きんは有名な女の歌ったと云うこの歌が好きであった。男から離れてしまった生活は考えてもぞっとする。板谷の持って来た、薔薇の薄いピンクの花びらを見ていると、その花の豪華さにきんは昔を夢見る。遠い昔の風俗や自分の趣味や快楽が少しずつ変化して来ている事もきんには愉しかった。一人寝の折、きんは真夜中に眼が覚めると、娘時代からの男の数を指でひそかに折り数えてみた。あのひととあのひと、それにあのひと、ああ、あのひともある……でも、あのひとは、あのひとよりも先に逢っていたのかしら……それとも、後だったかしら……きんは、まるで数え歌のように、男の思い出に心が煙たくむせて来る。思い出す男の別れ方によって涙の出て来るような人もあった。きんは一人一人の男に就いては、出逢いの時のみを考えるのが好

きであった。以前読んだ事のある伊勢物語風に、昔男ありけりと云う思い出をいっぱい心に溜めているせいか、きんは一人寝の寝床のなかで、うつらうつらと昔の男の事を考えるのは愉しみであった。――田部からの電話はきんにとっては思いがけなかったし、上等の葡萄酒にでもお眼にかかったような気がした。田部は、思い出に吊られて来るだけだ。昔のなごりが少しは残っているであろうかと云った感傷で、恋の焼跡を吟味しに来るようなものなのだ。草茫々の瓦礫の跡に立って、只、ああと溜息だけをつかせてはならないのだ。年齢や環境に聊かの貧しさもあってはならないのだ。慎み深い表情が何よりであり、雰囲気は二人でしみじみと没頭出来るようなただよいでなくてはならない。自分の女は相変らず美しい女だったと云う後味のなごりを忘れさせてはならないのだ。きんはとどこおりなく身支度が済むと、鏡の前に立って自分の舞台姿をたしかめる。万事抜かりはないかと……。茶の間へ行くと、もう、夕食の膳が出ている。薄い味噌汁と、塩昆布に麦飯を女中と差し向いで食べると、あとは卵を破って黄身をぐっと飲んでおく。きんは男が尋ねて来ても、昔から自分の方で食事を出すと云うことはあまりしなかった。こまごまと茶餉台をつくって、手料理なんですよと並べたてて男に愛らしい女と思われたいなぞとは露ほども考えないのである。家庭的な女と云う事はきんには何の興味もないのだ。結婚をしようなぞと思いもしない

男に、家庭的な女として媚びてゆくいわれはないのだ。こうしたきんに向って来る男は、きんの為に、いろいろな土産物を持って来た。きんにとってはそれが当り前なのである。きんは金のない男を相手にするような事はけっしてしなかった。金のない男ほど魅力のないものはない。恋をする男が、ブラッシュもかけない洋服を着たり、肌着の釦のはずれたのなぞ平気で着ているような男はふっと厭になってしまう。恋をする、その事自体が、きんには一つ一つ芸術品を造り出すような気がした。きんは娘時代に赤坂の万龍に似ていると云われた。人妻になった万龍を一度見掛けた事があったが、惚々とするような美しい女であった。きんはその見事な美しさに唸ってしまった。女が何時までも美しさを保つと云う事は、金がなくてはどうにもならない事なのだと悟った。きんが芸者になったのは、十九の時であった。大した芸事も身につけてはいなかったが、只、美しいと云う事で芸者になり得た。その頃、仏蘭西人で東洋見物に来ていたもうかなりな年齢の紳士の座敷に呼ばれて、きんは紳士から日本のマルグリット・ゴオチェとして愛されるようになり、きん自身も、椿姫気取りでいた事もある。肉体的には案外つまらない人であったが、きんには何となく忘れがたい人であった。ミッシェルさんと云って、もう仏蘭西の北の何処かで死んでいるに違いない年齢である。仏蘭西へ帰ったミッシェルから、オパールとこまかいダイヤを散りばめた腕環を

贈って来たが、それだけは戦争最中にも手放さなかった。――きんの関係した男達は、みんなそれぞれに偉くなっていったが、この終戦後は、その男達のおおかたは消息も判らなくなってしまった。相沢きんは相当の財産を溜め込んでいるだろうと云う風評であったが、きんはかつて待合をしようとか、料理屋をしようなぞとは一度も考えた事がなかった。持っているものと云えば、焼けなかった自分の家と、熱海の別荘を一軒持っているきりで、人の云うほどの金はなかった。別荘は義妹の名前になっていたのを、終戦後、折を見て手放してしまった。全くの無為徒食であったが、女中のきぬは義妹の世話であったが唖の女である。きんは、暮しも案外つつましくしていた。映画や芝居を見たいと云う気もなかったし、きんは何の目的もなくうろうろと外出する事はきらいであった。天日にさらされた時の自分の老いを人目に見られるのは厭であった。明るい太陽の下では、老年の女のみじめさをようしゃなく見せつけられる。如何なる金のかかった服飾も天日の前では何の役にもたたない。陽蔭の花で暮す事に満足であったし、きんは趣味として小説本を読む事が好きであった。養女を貰って老後の愉しみを考えてはと云われる事があっても、きんは老後なぞと云う思いが不快であったし、今日まで孤独で来た事も、きんには一つの理由があるのだった。――きんは両親がなかった。秋田の本庄近くの小砂川の生れだと云う事だけが記憶にあって、五

ツ位の時に東京に貰われて、相沢の姓を名乗り、相沢家の娘としてそだった。相沢久次郎と云うのが養父であったが、土木事業で大連に渡って行き、きんが小学校の頃から、この養父は大連へ行きっぱなしで消息はないのである。養母のりつは仲々の理財家で、株をやったり借家を建てたりして、その頃は牛込の藁店（わらだな）に住んでいたが、藁店の相沢と云えば、牛込でも相当の金持ちとして見られていた。その頃神楽坂に辰井と云う古い足袋屋があって、そこに、町子と云う美しい娘がいた。この足袋屋は人形町のみょうが屋と同じように歴史のある家で、辰井の足袋と云えば、山の手の邸町でも相当の信用があったものである。紺の暖簾を張った広い店先にミシンを置いて、桃割に結った町子の黒繻子の襟をかけてミシンを踏んでいるところは、早稲田の学生達にも評判だったとみえて、学生達が足袋をあつらえに来ては、チップを置いて行くものもあると云う風評だったが、この町子より五ツ六ツも若いきんも、町内では美しい少女として評判だった。神楽坂には二人の小町娘として人々に云いふらされていた。

――きんが十九の頃、相沢の家も、合百（ごうびゃく）の鳥越と云う男が出入りするようになってから、家が何となくかたむき始め、養母のりつは酒乱のような癖がついて、長い事暗い生活が続いていたが、きんはふっとした冗談から鳥越に犯されてしまった。きんはその頃、やぶれかぶれな気持ちで家を飛び出して、赤坂の鈴本と云う家から芸者になっ

て出た。辰井の町子は、丁度その頃、始めて出来た飛行機にふり袖姿で乗せて貰って洲崎の原に墜落したと云う事が新聞種になり、相当評判をつくった。きんは、欣也と云う名前で芸者に出たが、すぐ、講談雑誌なんかに写真が載ったりして、しまいには、その頃流行のエハガキになったりしたものである。

いまから思えば、こうした事も、みんな遠い過去のことになってしまったけれども、きんは自分が現在五十歳を過ぎた女だとはどうしても合点がゆかなかった。長く生きて来たものだと思う時もあったが、また短い青春だったと思う時もある。養母が亡くなったあと、いくらもない家財は、きんの貰われて来たあとに生れたすみ子と云う義妹にあっさり継がれてしまっていたので、きんは養家に対して何の責任もない躯になっていた。

きんが田部を知ったのは、すみ子夫婦が戸塚に学生相手の玄人下宿をしている頃で、きんは、三年ばかり続いていた旦那と別れて、すみ子の下宿に一部屋を借りて気楽に暮していた。太平洋戦争が始まった頃である。きんはすみ子の茶の間で行きあう学生の田部と知りあい、親子ほども年の違う田部と、何時か人目を忍ぶ仲になっていた。五十歳のきんは、知らない人の目には三十七八位にしか見えない若々しさで、眉の濃いのが匂うようであった。大学を卒業した田部はすぐ陸軍少尉で出征したのだけれど

も、田部の部隊はしばらく広島に駐在していた。きんは、田部を尋ねて二度ほど広島へ行った。

広島へ着くなり、旅館へ軍服姿の田部が尋ねて来た。革臭い田部の体臭にきんはへきえきしながらも、二晩を田部と広島の旅館で暮した。はるばると遠い地を尋ねて、くたくたに疲れていたきんは、田部の逞(たくま)しい力にほんろうされて、あの時は死ぬような思いだったと人に告白して云った。二度ほど田部を尋ねて広島に行き、その後田部から幾度電報が来ても、きんは広島へは行かなかった。昭和十七年に田部はビルマへ行き、終戦の翌年の五月に復員して来た。すぐ上京して来て、田部は沼袋のきんの家を尋ねて来たが、田部はひどく老けこんで、前歯の抜けているのを見たきんは昔の夢も消えて失望してしまった。田部は広島の生れであったが、長兄が代議士になったとかで、兄の世話で自動車会社を起して、東京で一年もたたない間に、見違えるばかり立派な紳士になってきんの前に現われ、近々に細君を貰うのだと話した。それからまた一年あまり、きんは田部に逢う事もなかった。――きんは、空襲の激しい頃、捨て値同様の値段で、現在の沼袋の電話つきの家を買い、戸塚から沼袋へ疎開していた。戸塚とは眼と鼻の近さでありながら、沼袋のきんの家は残り、戸塚のすみ子の家は焼けた。すみ子達が、きんのところへ逃げて来たけれども、きんは、終戦と同時にすみ

子達を追い出してしまった。尤(もっと)も追い出されたすみ子も、戸塚の焼跡に早々と家を建てたので、かえっていまではきんに感謝している有様でもあった。今から思えば、終戦直後だったので、安い金で家を建てる事が出来たのである。

きんも熱海の別荘を売った。手取り三十万近い金がはいると、その金でぼろ家を買っては手入れをして三、四倍には売った。きんは、金にあわてると云う事をしなかった。金銭と云うものは、あわてさえしなければすくすくと雪だるまのようにふくらんでくれる利徳のあるものだと云う事を長年の修業で心得ていた。高利よりは安い利まわりで固い担保を取って人にも貸した。戦争以来、銀行をあまり信用しなくなったきんは、なるべく金を外へまわした。農家のように家へ積んで置く愚もしなかった。その使いにはすみ子の良人(おっと)の浩義を使った。幾割かの謝礼を払えば、人は小気味よく働いてくれるものだと云う事もきんは知っていた。女中との二人住いで、四間ばかりの家うちは、外見には淋しかったのだけれども、きんは少しも淋しくもなかったし、外出ぎらいであってみれば、二人暮しを不自由とも思わなかった。泥棒の要心には犬を飼う事よりも、戸締りを固くすると云う事を信用していて、何処の家よりもきんの家は戸締りがよかった。女中は唖なので、どんな男が尋ねて来ても他人に聞かれる心配はない。その癖きんは、時々、むごたらしい殺され方をしそうな自分の運命を時々空

想する時があった。息を殺してひっそりと静まり返った家と云うものを不安に思わないでもない。きんは、朝から晩までラジオをかける事を忘れなかった。きんはその頃、千葉の松戸で花壇をつくっている男と知りあっていた。熱海の別荘を買った人の弟だとかで、戦争中はハノイで貿易の商社を起していたのだけれども、終戦後引揚げて来て、兄の資本で松戸で花の栽培を始めた。年はまだ四十歳そこそこであったが、頭髪がつるりと禿げて、年よりは老けてみえた。板谷清次と云った。二三度家の事できんを尋ねて来たけれども、板谷は何時の間にかきんの処へ週に一度は尋ねて来るようになっていた。板谷が来始めてから、きんの家は美しい花々の土産で賑わった。――今日もカスタニアンと云う黄いろい薔薇がざくりと床の間の花瓶に差されている。銀杏の葉、すこし零(こぼ)れてなつかしき、薔薇の園生(そのう)の霜じめりかな。黄いろい薔薇は年増ざかりの美しさを思わせた。誰かの歌にある。霜じめりした朝の薔薇の匂いが、つうんときんの胸に思い出を誘う。田部から電話がかかってみると、板谷よりも、きんは若い田部の方に惹かれている事を悟る。広島では辛かったけれども、あの頃の田部は軍人であったし、あの荒々しい若さも今になれば無理もなかった事だとつまされて嬉しい思い出である。激しい思い出ほど、時がたてば何となくなつかしいものだ。――田部が尋ねて来たのは五時を大分過ぎてからであったが、大きな包みをさげて来た。包

みの中から、ウイスキーや、ハムや、チーズなぞを出して、長火鉢の前にどっかと坐った。もう昔の青年らしさはおもかげもない。灰色の格子の背広に、黒っぽいグリンのズボンをはいているのは如何にも此時代の機械屋さんと云った感じだった。「相変らず綺麗だな」「そう、有難う、でも、もう駄目ね」「いや、うちの細君より色っぽい」「奥さまお若いんでしょう?」「若くても、田舎者だよ」きんは、田部の銀の煙草ケースから一本煙草を抜いて火をつけて貰った。女中がウイスキーのグラスと、さっきのハムやチーズを盛りあわせた皿を持って来た。「いい娘だね……」田部がにやにや笑いながら云った。「ええ、でも唖なのよ」ほほうと云った表情で、田部はじいっと女中の姿をみつめていた。柔和な眼もとで、女中は丁寧に田部に頭をさげた。きんは、ふっと、気にもかけなかった女中の若さが目障りになった。「御円満なのでしょう?」田部はぷうと煙を吹きながら、ああ僕ンとこかいと云った顔で、「もう来月子供が生れるンだ」と云った。へえ、そうなのと、きんはウイスキーの瓶を持って、田部のグラスにすすめた。田部は美味そうにきゅうとグラスを空けて、自分もきんのグラスにウイスキーをついでやった。「いい生活だな」「あら、どうして?」「外は嵐がごうごうと吹き荒さんでいるのにさ、君ばかりは何時までたっても変らない……不思議な人だよ。どうせ、君の事だから、いいパトロンがいるンだろうけど、女はいいな」「それ、皮肉

ですか？　でも、私、別に、田部さんに、そんな風な事云われる程、貴方に御厄介かけたって事ないわね？」「憤ったの？　そうじゃないンだよ。そうじゃないンだ。あンたは倖せな人だって云うンだよ。男の仕事って辛いもンだから、つい、そンな事を云ったのさ。いまの世は、あだやおろそかには暮せない。喰うか喰われるかだ。僕なンか、毎日ばくちをして暮しているようなもンだからね」「だって、景気はいいンでしょう？」「よかないさ……あぶない綱渡り、耳鳴りがする位辛い金を使っているンだぜ」きんは黙ってウイスキーをなめた。壁ぎわでこおろぎが啼いているのがいやにしめっぽい。田部は、二杯目のウイスキーを飲むと、荒々しくきんの手を火鉢越しにつかんだ。指環をはめていない手が絹ハンカチのように頼りないほど柔い。きんは手の先にある力をじっと抜いて、息を殺していた。力の抜けている手は無性に冷たくてぽってりと柔らかい。田部の酔った眼には、昔の様々が渦をなし心に迫って来る。昔のままの美しさで女が坐っている。不思議な気がした。絶えず流れる歳月のなかに少しずつ経験が積み重なってゆく。その流れのなかに、飛躍もあれば墜落もある。だが、昔の女は何の変化もなく太々しくそこに坐っている。田部はじいっときんの眼をみつめた。眼をかこむ小皺も昔のままだ。輪郭も崩れてはいない。この女の生活の情態を知りたかった。この女には社会的の反射は何の反応もなかったのかもしれない。箪笥を飾り

長火鉢を飾り、豪華に群生した薔薇の花も飾り、にっこりと笑って自分の前に坐っている。もう、すでに五十は越している筈だのに、匂うばかりの女らしさである。田部はきんの本当の年齢を知らなかった。アパート住いの田部は、二十五歳になったばかりの細君のそそけた疲れた姿を瞼に浮べる。きんは火鉢のひき出しから、のべ銀の細い煙管(キセル)を出して、小さくなった両切りをさして火をつけた。田部が、時々膝頭をぶるぶるとゆすぶっているのが、きんには気にかかった。金銭的に参っている事でもあるのかも知れないと、きんはじいっと田部の表情を観察した。広島へ行った時のような一途な思いはもうきんの心から薄れ去っている。二人の長い空白が、きんには現実に逢ってみるとちぐはぐな気がする。そうしたちぐはぐな思いが、きんにはもどかしく淋しかった。どうにも昔のように心が燃えてゆかないのだ。この男の肉体をよく知っていると云う事で、自分にはもうこの男のすべてに魅力を失っているのかしらとも考える。雰囲気はあったにしても、かんじんの心が燃えてゆかないと云う事に、きんは焦りを覚える。「誰か、君の世話で、四十万ほど貸してくれる人ない？」「あら、お金のこと？　四十万なンて大金じゃないの？」「うん、いま、どうしても、それだけ欲しいンだよ。心当りはない？」「ないわ、第一、こんな無収入な暮しをしている私に、そンな相談をしたって無理じゃないの……」「そうかなア、うんと、利子をつけるが、ど

うだろう？」「駄目！　私にそンな事おっしゃっても無理よ」きんは、急に寒気だつような気がした。板谷との長閑な間柄が恋しくなって来る。きんは、がっかりした気持ちで、しゅんしゅんと沸きたっているあられの鉄瓶を取って茶を淹れた。「二十万位でもどうにかならない？　恩にきるンだがなア……」「おかしな人ね？　私にお金のことをおっしゃったって、私にはお金のない事よく判っていらっしゃるじゃないの……。私がほしい位のものだわ。私に逢いたい為に来て下すったンじゃなく、お金の話で、私のとこへいらっしたの？」「いや、君に逢いたい為さ、そりゃア逢いたい為だけど、君になら、何でも相談が出来ると思ったからなンだよ」「お兄様に相談なさればいいのよ」「兄貴には話せない金なンだ」きんは返事もしないで、ふっと、自分の若さも、もうあと一二年だなと思う。昔の焼きつくような二人の恋が、いまになってみると、お互いの上に何の影響もなかった事に気がついて来る。あれは恋ではなく、強く惹きあう雌雄だけのつながりだったのかも知れない。風に漂う落葉のようなもろい男女のつながりだけで、ここに坐っている自分と田部は、只、何でもない知人のつながりとしてだけのものになっている。きんの胸に冷やかなものが流れて来た。田部は思いついたように、にやりとして、「泊ってもいい？」と小さい声で、茶を呑んでいるきんに尋ねた。きんは吃驚した眼をして、「駄目よ。こんな私をからかわないで下さい」と、

目尻の皺をわざとちぢめるようにして笑った。美しい皓い入れ歯が光る。「いやに冷酷無情だな。もう、一切金の話はしない。一寸、昔のきんさんに甘ったれたンだ。でも、――ここは別世界だものね。君は悪運の強い人だよ。どんな事があったってくたばらないのは偉い。いまの若い女なンか、そりゃアみじめだからね。君、ダンスはしないの？」きんは、ふふんと鼻の奥でわらった。若い女がどうだって云うんだろう……。私の知った事じゃないわ。「ダンスなンて知らないわ。貴方なさるの？」「少しはね」「そう、いい方があるンでしょう？　それでお金がいるンじゃないの？」「馬鹿だなア、女にみつぐ程、ぼろい金もうけはしていない」「あら、でも、とても、その身だしなみは紳士じゃないのよ。相当なお仕事でなくちゃ、出来ない芸だわ」「これははったりなンだ。ふところはぴいぴいなンだぜ。七転び八起きも此頃はあわただしくてね……」きんはふふふとふくみ笑いをして、田部の房々とした黒髪にみとれている。まだ、十分房々として額ぎわにたれている。角帽の頃の匂う水々しさは失せているけれども、頬のあたりがもう中年の仇めかしさを漂わせて、品のいい表情はないながらも、逞しい何かがある。猛獣が遠くから匂いを嗅ぎあっているような観察のしかたで、きんは、田部にも茶を淹れてやった。「ねえ、近いうちにお金の切りさげってあるって本当なの？」きんは冗談めかして尋ねた。「心配するほど持ってるンだな？」「まア！　すぐ、

それだから、貴方って変ったわね。そンな風評を人がしてるからなのよ」「さア、そンな無理なことはいまの日本じゃ出来ないだろうね。金のないものには、まず、そンな心配はないさ」「本当ね……」きんはいそいそとウイスキーの瓶を田部のグラスに差した。「ああ、箱根かどっか静かなところへ行きたいな。二三日そんな処でぐっすり寝てみたい」「疲れてるの」「うん、金の心配でね」「でも、金の心配なンて貴方らしくていいじゃアありませんの？　なまじ、女の心配じゃないだけ……」田部は、きんの取り澄しているのが憎々しかった。上等の古物を見ているようでおかしくもある。一緒に一夜を過したところで、ほどこしをしてやるようなものだと、田部は、きんのあごのあたりを見つめた。しっかりしたあごの線が意志の強さを現わしている。さっき見た唖の女中の水々しい若さが妙に瞼にだぶって来た。美しい女ではないが、若いと云う事が、女に眼の肥えて来た田部には新鮮であった。なまじ、この出逢いが始めてならば、こうしたもどかしさもないのではないかと、田部は、さっきよりも疲れの見えて来たきんの顔に老いを感じる。きんは何かを察したのか、さっと立ちあがって、隣室に行くと、鏡台の前に行き、ホルモンの注射器を取って、ずぶりと腕に射した。肌を脱脂綿できつくこすりながら、鏡のなかをのぞいて、パフで鼻の上をおさえた。色めきたつ思いのない男女が、こうしたつまらない出逢いをしていると云う事に、きんは

口惜しくなって来て、思いがけもしない通り魔のような涙を瞼に浮べた。板谷だったら、膝に泣き伏すことも出来る。甘えることも出来る。長火鉢の前にいる田部が、好きなのかきらいなのか少しも判らないのだ。帰って貰いたくもあり、もう少し、何かを相手の心に残したい焦りもある。田部の眼は、自分と別れて以来、沢山の女を見て来ているのだ。厠へ立って、帰り、女中部屋を一寸のぞくと、きぬは、新聞紙の型紙をつくって、洋裁の勉強を一生懸命にしていた。大きなお尻をぺったりと畳につけて、かがみ込むようにして鋏をつかっている。きっちり巻いた髪の襟元が、艶々と白くて、見惚れるようにたっぷりとした肉づきであった。きんは、そのままま長火鉢の前へ戻った。田部は寝転んでいた。きんは茶箪笥の上のラジオをかけた。思いがけない大きい響きで第九が流れ出した。田部はむっくりと起きた。そしてまたウイスキーのグラスを唇につける。「君と、柴又の川甚へ行った事があったね。えらい雨に降りこめられて、飯のない鰻を食った事があったなア」「ええ、そンな事あったわね、あの頃はもう、食べ物がとても不自由な時だったわ。貴方が兵隊さんになる前よ、床の間に赤い鹿の子百合が咲いててさア、二人で、花瓶を引っくり返したこと覚えている？」「そンな事あったね……」きんの顔が急にふくらみ、若々しく表情が変った。「何時かまた行こうか？」「ええ、そうね、でももう、私、おくくうだわ……もう、あそこも、

何でも食べさせるようになってるでしょうね？」きんは、さっき泣いた感傷を消さないように、そっと、昔の思い出をたぐりよせようと努力している。そのくせ、田部とは違う男の顔が心に浮ぶ。田部と柴又に行ったあと、終戦直後に、山崎と云う男と一度、柴又へ行った記憶がある。山崎はつい先達胃の手術で死んでしまった。晩夏でむし暑い日の江戸川べりの川甚の薄暗い部屋の景色が浮んで来る。こっとん、こっとん、水揚げをしている自動ポンプの音が耳についていた。カナカナが鳴きたてて、窓べの高い江戸川堤の上を買い出しの自転車が競走のように銀輪を光らせて走っていたものだ。山崎とは二度目のあいびきであったが、女に初心（うぶ）な山崎の若さが、きんにはしみじみと神聖に感じられた。食べ物も豊富だったし、終戦のあとの気の抜けた世相が、案外真空の中にいるように静かだった。帰りは夜で、新小岩へ広い軍道路をバスで戻ったのを覚えている。「あれから、面白い人にめぐりあった？」「私？」「うん……」「面白い人って、貴方以外に何もありませんわ」「嘘（うそ）つけ！」「あら、どうして？　そうじゃないの？　こんな私を、誰が相手にするものですか……」「信用しない」「そう……でも、私、これから咲き出すつもり、生きている甲斐にね」「まだ、相当長生きだろうからね」「ええ、長生きをして、ぽろぽろに老いさらばえるまで……」「浮気はやめない？」「まア、貴方って云うひとは、昔の純なとこ少しもなくなったわね。どうして、そンな厭

なことを云う人になったンでしょう？　昔の貴方は綺麗だったわ」田部は、きんの銀の煙管を取って吸ってみた。じゅっと苦味いやにが舌に来る。田部はハンカチを出して、べっとやにを吐いた。「掃除しないからつまってるのよ」きんは笑いながら、煙管を取りあげて、散り紙の上に小刻みに強く振った。田部は、きんの生活を不思議に考える。世相の残酷さが何一つ跡をとどめてはいないと云う事だ。二三十万の金は何とか都合のつきそうな暮しむきだ。田部はきんの肉体に対しては何の未練もなかったが、この暮しの底にかくれている女の生活の豊かさに追いすがる気持ちだった。戦争から戻って、只の血気だけで商売をしてみたが、兄からの資本は半年たらずですっかり使い果していたし、細君以外の女にもかかわりがあって、その女にもやがて子供が出来るのだ。昔のきんを思い出して、もしやと云う気持ちできんの処へ来たのだけれども、きんは、昔のような一途のところはなくなっていて、いやに分別を心得ていた。田部との久々の出逢いにも一向に燃えては来なかった。躯を崩さない、きちんとした表情が、田部には仲々近寄りがたいのである。もう一度、田部はきんの手を取って固く握ってみた。きんはされるままになっているだけである。火鉢に乗り出して来るでもなく、片手で煙管のやにを取っている。

長い歳月に晒されたと云う事が、複雑な感情をお互いの胸の中にたたみこんでしま

った。昔のあのなつかしさはもう二度と再び戻っては来ないほど、二人とも並行して年を取って来たのだ。二人は黙ったまま現在を比較しあっている。幻滅の輪の中に沈み込んでしまっている。二人は複雑な疲れ方で逢っているのだ。小説的な偶然はこの現実にはみじんもない。小説の方がはるかに甘いのかも知れない。微妙な人生の真実。二人はお互いをここで拒絶しあう為に逢っているに過ぎない。田部は、きんを殺してしまう事も空想した。だが、こんな女でも殺したとなると罪になるのだと思うと妙な気がした。誰からも注意されない女を一人や二人殺したところで、それが何だろうと思いながらも、それが罪人になってしまう結果の事を考えると馬鹿馬鹿しくなって来るのだ。たかが虫けら同然の老女ではないかと思いながらも、この女は何事にも動じないでここに生きているのだ。二つの箪笥の中には、五十年かけてつくった着物がぎっしりと這入(はい)っているに違いない。昔、ミッシェルとか云った仏蘭西人に贈られた腕環を見せられた事があったけれども、ああした宝石類も持っているに違いない。この家も彼女のものであるにきまっている。唖の女中を置いている女の一人位を殺したところで大した事はあるまいと空想を逞しくしながらも、田部は、此女に思いつめて、戦争最中あいびきを続けていた学生時代の、この思い出が息苦しく生鮮を放って来る。酒の酔いがまわったせいか、眼の前にいるきんのおもかげが自分の皮膚の中に妙にし

びれ込んで来る。手を触れる気もないくせに、きんとの昔が量感を持って心に影をつくる。

きんは立って、押入れの中から、田部の学生時代の写真を一枚出して来た。「ほほう、妙なもの持っているンだね」「ええ、すみ子のところにあったのよ。貰って来たの、これ、私と逢う前の頃のね。この頃の貴方って貴公子みたいよ。紺飛白でいいじゃない？　持っていらっしゃいよ。奥さまにお見せになるといいわ。綺麗ね。いやらしい事を云うひとには見えませんね」「こんな時代もあったンだね？」「ええ、そうよ。このままですくすくとそだって行ったら、田部さんは大したものだったのね？」「じゃア、すくすくとそだたなかったって云うの？」「ええ、そう」「そりゃア、君のせいだし、長い戦争もあったしね」「あら、そンな事、こじつけだわ。そンな事は原因にならなくてよ。貴方って、とても俗になっちゃった……」「へえ……俗にね。これが人間なンだよ」「でも、長い事、此写真を持ち歩いていた私の純情もいいじゃアないの？」「多少は思い出もンだろうからね。僕にはくれなかったね？」「私の写真？」「うん」「写真は怖いわ。でも、昔の私の芸者時代の写真、戦地に送って上げたでしょう？」「どっかへおっことしちゃったなア……」「それごらんなさい。私の方が、ずっと純だわ」

長火鉢のとりでは、仲々崩れそうにもない。田部は、もうすっかり酔っぱらってし

まった。きんの前にあるグラスは、始めの一杯をついだままのが、まだ半分以上も残っている。田部は冷たい茶を一気に呑んで、自分の写真を興味もなく横板の上に置いた。「電車、大丈夫？」「帰れやしないよ。このまま酔っぱらいを追い出すのかい」「ええ、そう、ぽいと放り出しちゃうわ。ここは女の家で、近所がうるさいですからね」「近所？　へえ、そンなもの君が気にするとは思わないな」「気にします」「旦那が来るの？」「まア！厭な田部さん、私、ぞっとしてしまってよ。そンなこと云う貴方ってきらいッ！」「いいさ、金が出来なきゃ、二三日帰れないンだ。ここへ置いて貰うかな……」きんは、両手で頬杖をついて、じいっと大きい眼を見はって田部の白っぽい唇を見た。百年の恋もさめ果てるのだ。黙って、眼の前にいる男を吟味している。昔のような、心のいろどりはもうお互いに消えてしまっている。青年期にあった男の恥じらいが少しもないのだ。金一封を出して戻ってもらいたい位だ。だが、きんは、眼の前にだらしなく酔っている男に一銭の金も出すのは厭であった。初々しい男に出してやる方がまだましである。自尊心のない男ほど厭なものはない。自分に血道をあげて来た男の初々しさをきんは幾度も経験していた。きんは、そうした男の初々しさに惹かれていたし、高尚なものにも思っていた。理想的な相手を選ぶ事以外に彼女の興味はない。きんは、心の中で、田部をつまらぬ男になりさがったものだと思った。戦死も

しないで戻って来た運の強さが、きんには運命を感じさせる。広島まで田部を追って行った、あの時の苦労だけで、もうこの男とは幕にすべきだったと思うのだった。「何をじろじろ人の顔見てるンだ？」「あら、あなただって、さっきから、私をじろじろ見てて何かいい気な事考えていたでしょう？」「いや、何時逢っても美しいきんさんだと見惚れていたのさ……」「そう、私も、そうなの。田部さんは立派になったと思って……」「逆説だね」田部は、人殺しの空想をしていたのだと口まで出かけているのをぐっとおさえて、逆説だねと逃げた。「貴方はこれから男ざかりだから愉しみだわね」「君もまだまだじゃないの？」「私？　私はもう駄目。このまましぼんでゆくきり、二三年したら、田舎へ行って暮したいのよ」「ぼろぼろになるまで長生きして、浮気するって云ったのは嘘？」「あら、そんな事、私云いませんよ。私って、思い出に生きてる女なのよ。只、それだけ。いいお友達になりましょうね」「逃げてるね。女学生みたいな事を云いなさンなよ。ええ。思い出だのってものはどうでもいいな」「そうかしら……だって、柴又へ行ったの云い出したの貴方よ」田部はまた膝をぶるぶるとせっかちにゆすぶった。金が欲しい。金。何とかして、只、五万円でも、きんに借りたいのだ。「本当に都合つかないかねえ？　店を担保に置いても駄目？」「あら、また、お金の話？　そンな事を私におっしゃっても駄目よ。私、一銭もないのよ。そンなお金持ちも知ら

ないし、あるようでないのが金じゃないの。私、貴方に借りたい位だわ……」「そりゃアうまくゆけば、うんと君に持って来るさ。君は、忘れられない人だもの、……」「もう沢山よ、そんなおせじは……お金の話しないって云ったでしょう？」わあっと四囲いちめん水っぽい秋の夜風が吹きまくるようで、田部は、長火鉢の火箸を握った。一瞬、凄まじい怒りが眉のあたりに這う。謎のように誘惑される一つの影に向って、田部は火箸を固く握った。雷光のようなどろきが動悸を打つ。その動悸に刺戟される。きんは何となく不安な眼で田部の手元をみつめた。いつか、こんな場面が自分の周囲にあったような二重写しを見るような気がした。「貴方、酔ってるのね、泊って行くといいわ……」田部は泊って行くといいと云われて、ふっと火箸を持った手を離した。ひどく酩酊したかっこうで、田部はよろめきながら厠へ立って行った。きんは田部の後姿に予感を受け取り、心のうちでふふんと軽蔑してやる。この戦争ですべての人間の心の環境ががらりと変ったのだ。きんは、茶棚からヒロポンの粒を出して素早く飲んだ。ウイスキーはまだ三分の一は残っている。これをみんな飲ませて、泥のように眠らせて、明日は追い返してやる。自分だけは眠っていられないのだ。よく熾った火鉢の青い炎の上に、田部の若かりし頃の写真をくべた。もうもうと煙が立ちのぼる。物の焼ける匂いが四囲にこもる。女中のきぬがそっと開いている襖からのぞいた。き

んは笑いながら手真似で、客間に蒲団を敷くように云いつけた。紙の焼ける匂いを消す為に、きんは薄く切ったチーズの一切れを火にくべた。「わア、何焼いてるの」厠から戻って来た田部が女中の豊かな肩に手をかけて襖からのぞき込んだ。「チーズを焼いて食べたらどンな味かと思って、火箸でつまんだら火におっことしちまったのよ」白い煙の中に、まっすぐな黒い煙がすっと立ちのぼっている。電気の円い硝子笠が、雲の中に浮いた月のように見えた。あぶらの焼ける匂いが鼻につく。きんは、煙にむせて、四囲の障子や襖を荒々しく開けてまわった。

（別冊文藝春秋　昭和二十三年十一月）

表記について

本書は、『林芙美子全集』（文泉堂出版　一九七七年四月二〇日）を底本として使用し、原則として新字体、新仮名づかいに改め、難読と思われる語には振り仮名をつけました。

なお本作品中、今日の観点からすれば差別等にかかわる不適当な表現がありますが、作品自体のもつ文学性、芸術性と時代的背景、および著者が故人であることを考慮してそのままとしました。

（北九州市立文学館）

北九州市立文学館文庫（２）
平成19年11月30日発行
著者　林芙美子
発行　北九州市立文学館
〒803-0813　北九州市小倉北区城内４－１
Tel (093)571-1505
Fax (093)571-1525
印刷　株式会社ゼンリンプリンテックス

北九州市立文学館文庫 2

北九州市立
文学館
Kitakyushu
Literature Museum